

で栖息する事尚し。其山の体光かたちくわうじんわうけい尋往詣の便、おのく止宿止所定り宛馱亭の量程こ、に置くが如し、此外九品の峰有
り、蓋し安養界に擬す。「第一の宿峰靈山しゆくほうれいと号す、これを西方の宿と称す。第二を立盤手向たついはのたむけと号す。第三を熊小屋居くまこやゐと
なづく、此宿の西に崇峯あり、牟尼山むにと号す、次に一の嵩嶺あり善覺山ぜんかくといふ、中品上生に象るなり。第四を阿弥陀山
と号す、次に奇峯あり明覺山めいかくといふ、中品中生に象るなり。第五を眼覺淨土げんかくじやうとと号す、中品下生に象るなり。次に崇岳そうかくあ
り離苦淨土りくじやうとと号す、上品下生に象るなり。第六を垂原すゐはらと号す、次に奇峯あり无垢山むくさんといふ、上品中生に象るなり。第七
を水飲みづのみと号す、次に奇峯あり真色淨土しんしよくじやうとといふ、上品上生に象るなり。又一峯あり楽門淨土がくもんじやうとといふ、下品下生に象るなり。
第八を平地と号す、其次の峯を真覺淨土しんかくといふ、下品中生に象るなり。第九を瀧本たきもととなづく。次に峯あり無漏淨土むろじやうととい
ふ、下品上生に象るなり。次の峯を文珠嵩もんじゆたけと称す、此峯に一奇石あり、其状獅子のごとし、次に峯あり、大日金輪仏こんりんぶつ
頂山ちやうさんといふ、此峯に至つては大仏頂および諸の陀羅尼だらにを誦すなり。次の峯を大悲山だいひと号す。大悲山は数峯の中台なり。
石窟ありて此辺に一靈石あり、其状鸞鏡らんきやうの如し、千手觀音せんじゆくわんおん宝鏡ほうきやうの御手なり、大悲山だいひさんの号蓋こ、にありとぞ。山高く路
深うして人事最希なり、太白天たいはくてんを去の形勢なり。三尺を蟻壤に嘲り遥海えうかいこれを望んで眼路を遮るなり。百谷牛峯ひやくこくぎやうほうに編り、
かの石窟の中央に当て此堂閣の基跡を置。久寿元甲戌年二月三間の堂一字を建立し、白檀二尺せんじゆの千手十一面觀世音菩薩くわんせおんぼさつ
の像一軀を安置し奉り、仏座の下に石竇あり、水の滴る事宛檐溜の如し、これをもつて闕伽を供し、盥滌に充。一尺三
寸ふせうみやうわうの不動明王、五寸の二童子像各一体、同じく毘沙門天びしゃもんてんの像一体、同年四月に至つて仙院せんあん。「鳥羽院とぼのあん」忽勅命降て此像

を請じ奉り給ふ、恩不意に出て事これ鄭重なり、歡喜踊躍隨喜悅予す。むかし唐たうの不空三藏ふくうさんざうの仏閣を營給ふは是肅宗これしゆくそう皇帝くわうていの仁恩なり、今貧道比丘の精廬を建るは寧ろ禪定ぜんぢやう法皇はふわうの叡慮えいりょに有ずや。三宝に歸して万邦を治す、六度を以て四海を撫給ふ、古今に彙なく和漢に類なし、若利生を我后に仰ずんば必无縁の比丘弘願ひくくぐわんを遂る事を得ん。若善根ぜんこんを此山に植ずんば何ぞかならず孤露の少僧素意を果す事を得ん。幸なる哉。抑善根ぜんこんの員意趣まちくにわかり、其一に曰、今生大仏頂陀羅尼じやうだいふつちやうだらにを誦して来世に一切衆生の死の重病を療じ、其二に曰、早く西方極樂に生れ利生たらん事を得て還て此巖嶺に住し、又通力を得て法華經におよび一切の經論を誦す、其声法界に達しこれを聞くものかならず利益を蒙らん、二途の願大概かくの如し。弟子むかし弓馬きうばの家に生れ因果の理を辨る事なし、畋獵をもつて業とし漁釣を事とす、春秋廿一忽に親父を喪ふ。かの時に当て親父弟子に命じて曰、平生の悪業来世の苦果を顧みず、何為汝方便をめぐらし解脱を祈るべし、弟子一たび斯事を聞て刀劍胸にあるが如し、行年廿五善縁忽に催し、首を剃て衣を染、これより難行苦行、念々歩々、我父の何の所にか生れん事を知らんと思ひ、造次ざうじ顛沛てんぱいも我父のいづれの苦をか受る事を知らんと期す。丹誠一心を尽し、素念二年に及で夢中に父の貌を見る、身は馬、面は人。其後二年を歴て熊野山那智如意輪堂くまのさんなちにょいりんどうに參詣して又夢想あり、我父面は人、身は獅子。其後十一年を経て播磨国八塔寺はりまのくにはつたふじに修行す、蓋十一面觀音めんくわんおんの靈地なり。夢中くわんぜんおんに觀世音告て、曰、汝が父すでに浄土に往生す、前後三夢仰で信をとる、又弟子平生へいせいの行業紙墨に存するもの、如法の儀式によつて妙法蓮華經八部を書写し、一千五百日を限とす。久しく常行三昧を修し、又常行常坐の両三昧を修す、又千六百日